怪奇の窓 ②

黒沼 健

怪奇の窓

②

黒沼 健

毎日新聞社

怪奇の窓②
価　三七〇円
昭和四十一年四月五日　印刷
昭和四十一年四月十五日　発行
著者　黒沼　健
発行者　赤木益一郎
印刷所　大日本印刷
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町
検印省略

© 黒沼健、1966

怪奇の窓2／目次

UFOと宇宙人

宇宙人着陸！……七
宇宙人と会談……八
謎の紙片と文字……一〇
空飛ぶ円盤の化石……一九
〝空飛ぶ円盤〟大活躍……二三
人間を盲目にした怪発光体……三〇
恐怖の一九九九年……三四
アダムスキーの回顧……三八

考古学的な話

〝ムー大陸〟の謎……四九
生きていた化石……五五
海の大怪物……五七
中生代の怪獣出現！……六四
その後のネッシー……七五
マヤの大トンネル……七六
オレゴンの多毛巨人……八二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

砂漠に描かれた巨大な画……八六
カラハリの古代都市……九〇
剣山の謎の地下道……一〇〇

奇蹟的な話

ルールドの奇蹟……一〇九
蔭のルールド……一一三
謎の少女の横顔……一一六
壁に現われた大司祭長……一二〇
ピオの奇蹟……一二九
キリストの経帷子……一三三

ある日、空から…

天から豆が降ってきた……一四一
プールの中のエビ……一四二
巨大な白い泡……一四四
空の幻影……一四五
船舶消失の謎……一四九
空の怪異と謎……一五三

謎と怪奇的な話

幻の幌馬車……一六九
撮影されない被写体……一七〇
一丁の鋏……一七二
透明少年……一七六
緑色の人間……一八〇
ジェニー・サバレットの性の秘密……一八四
天才ピアニスト・モーツァルト嬢……一九一
奇怪な実験……一九五
人間交代……一九八
人間望遠鏡……二〇三
二千歳のエジプトの王女……二〇六
塚……二二五
獣に育てられた子供……二三〇
人間馬と魔法人形……二三九

あとがき

カバー・扉・挿絵　白根光夫

UFOと宇宙人

UFOとは改めて説明するまでもなく、空の未確認飛行物体（Unidentified Flying Objects）＝〝空飛ぶ円盤〟のことである。

宇宙人着陸！

一九六四年四月二十四日午後五時四十分、ニューメキシコのソコッロのパーク街の南を、ロニー・サモラ巡査は、一台の自動車のあとを追っていたが、ラ・ブエナ・パストール教会の近くへきたとき、西南のほうに、異様な轟音と青い炎があがったのを見て、はっとなった。

その方角には火薬庫があったので、サモラ巡査は、それが爆発したのではないかと思ったのだ。彼は無線で本部へ連絡すると、車の尾行のほうはやめて、パーク街を斜めに突っ切り、岩山の曲がりくねった細い道を縫って、火薬庫をめざした。小さな丘を越えて湿地に下ると、百五十メートルほど先のくぼ地に、先刻の轟音と炎の主と思われるものが引っくり返って腹を上に向けていた。彼は自動車の転覆事故だと思い、その旨を本部へ無線で報告した。

そして、さらに接近すると、彼はとんでもないものを見てびっくり仰天した。転覆自動車と思ったのは、実は卵形をした白色の不思議なものだった。その長さは三〜四メートルほど、だいたい自動車の大きさぐらいである。それには車輪はなく、二本の足のようなものが下から突き出て

いた。それだけならまだいい。サモラ巡査を、息の根が止まるほど驚かしたのは、人間のような形をしたものが二つ、その卵形のもののそばで、動いていたことだ。その高さは一メートルあまりと見た。

サモラ巡査は、勇気を鼓して車から降りた。ところが、その人間のようなものの一つは、巡査の姿を見ると、もう一つのやつと卵形のものの中に走りこんだが、とたんにそれは下から青い炎を噴きだし、耳を聾する轟音を発して上昇、またたくまに視界から消えた。それが着陸していたくぼ地の草や土は、焼け焦げていた。

宇宙人と会談

先に宇宙人が地球に着陸したことを書いたら、こんどは宇宙人と話をしたものが出てきた。

今年（一九六四年）の四月二十一日のこと、ニューワーク渓谷（ニューヨーク州）の近くに住むゲーリー・ウィルコックス（二一歳）という農夫が、畑で仕事をしていると、そばの丘の上で何やらピカリと光った。その丘には、こわれた冷蔵庫が捨ててあったから、おおかたそれが太陽の光を反

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

射したのだろうと思った。だが、気になったので、仕事をやめて丘の上へ行ってみると、百メートルほど先に、長さ六メートル、幅四メートル、高さ一メートルほどの卵形をした金属性のものが、地上約一メートルのところに、フワフワ浮かんでいる。先刻の光は、その金属性のものの反射だったのだ。

彼は、これが話に聞く〝空飛ぶ円盤〟かしらと思った。その卵形の下に、異様なものが立っている。頭、胴、手足を、同じ金属様のもので、すっぽり包んだ人間みたいなものである。彼を認めても別に敵意を示すようすもないので、彼は、そばへ行ってみた。彼らは、そこの土地を掘って二つの箱につめていた。

ウィルコックスは、

「こんなとこの土を掘って、どうするんだね」

といってから、そのことばが通じたかしらと思った。ところが、相手は意外にもりっぱな英語で返事をした。

自分たちは、地球にいちばん近い星からやってきたが、地球人の農耕の巧妙なことに驚き、この土をもって帰って研究するのだと答えた。ウィルコックスは、このときとばかり、これまでの経験にもとづく農耕の秘策を、とうとうと語った。

その間、およそ二時間半。二人の宇宙人は、次回は二十四カ月後にくるといって、宇宙のかな

たに消え去った。この会見談は、ウィルコックスが、タイオーガ郡の保安官事務所で供述したあらましである。

謎の紙片と文字

一九六五年、一人の老人が目前五メートルの所で〝空飛ぶ円盤〟を目撃したが跡に残された奇妙な置土産は？

着陸した円盤から小人が

アメリカのUFO（空飛ぶ円盤）研究家の報告によると、円盤の活動は一九六四年の秋以来、殊に活潑になり、アメリカ大陸の上空には、これまでに増して頻繁に出現するようになった。これは一説に、今年（一九六五年）二月十五日に、火星と地球が非常に接近したためではないかというものがいる。つまり円盤の活動と火星とは関係大ありというのである。

研究家のデータによると、一九六四年十一月十六日以来、一九六五年三月三十日に至るまでに、アメリカ大陸で目撃された円盤――それも怪しげなものはむろん控除しての話である――の回数は、実に二十四回の多きに及んでいる。（むろんこの回数は、その研究家の個人のデータであるから、実数より落ちているものがあることはいうまでもない）しかし、今回特に目についたのは、地球上に着陸した円盤と、その円盤から宇宙人と想像される小人のような生物が、地上に姿をあらわしたことである。

これは一九六四年の春まで溯ぼると、一九六五年三月十四日までに、何回かが目撃されている。（この中の一つ、一九六五年三月二日フロリダ州に姿をあらわしたものは、右の研究家のデータにはない）

従来もヨーロッパ、殊にフランスでは、地上に着陸した円盤から小人があらわれたということは、しばしば伝えられたが、アメリカ大陸では、一九六三年以来ほんの数えるほどしかなかった。そして、その多くは、円盤研究家の執念にあらわれたヴィジョンではないかとさえ疑われていたのである。ところが、今度は最早ヴィジョンというには余りに回数を重ねて地球上に着陸している。中でも今年（一九六五年）一月と三月には四回、それも三月に入ってからの三回はいずれもフロリダ州に降下しているのである。この中の三回については他誌に簡単なデータを発表したが、三月二日（フロリダ州）のものは、右の研究家のデータからも漏れているので、この機会に少し詳しく紹介することにしよう。

危害を加えなかった宇宙人

三月二日の午後一時五十五分という真昼間、フロリダ州のウィーキー・ウォチー・スプリングズで、ジョン・リーヴスという老人（六六歳）は、円盤の突然の出現にすんでのことに目を廻わすところだった。

リーヴス老人は長いこと、ニューヨークの船渠で沖仲仕（おきなかし）の仕事をしていたので、隠退後は日頃見飽きた海からは遠去り、広々とした緑の山野で暮して老後の日を楽しんでいた。老人が日課の午後の散歩をしていたとき、灌木と草むらの平地までくると、その円盤は大きな円を描きながら、ゆっくり草むらの上に舞い下りてきた。その場所は老人のところから、七百メートルほど先だった。始め老人には、それは赤味を帯びた紫色に見えた。が、あとから考えると青緑色をしていたようにも思われた。老人は、そのことを不思議がっていたが、それは、光線の具合で虹色に光っていたということ以外の何物でもない。

老人は完全に驚愕の底に叩きつけられていた。生まれてから、このようなものを見たのは始めてなので、それは無理もない。ところが、人間には誰にも〝怖わいもの見たさ〟という厄介な好奇心がある。老人の足は、彼の意思を無視して、知らないうちに、それから五十メートルしかないところまで接近していた。

するとそのとき重ねて老人の胆を潰させるようなことが起こった。彼から五メートルと離れていないすぐそばの灌木の蔭から不思議なものが姿を現わしたのだ。それは銀色に輝く服を着た百五十センチほどの高さの〝もの〟だった。それは今しも着陸した円盤のほうへ向かって歩いて行く。だが、円盤のそばまで行くと、それは立ち停ってくるりと向きを変えて、今度はリーヴス老人のほうへ歩いてきた。老人は生きた心地がなかった。

（こいつは、おれをどうしようというのだろう！）震えながら、その場に石像のように棒立ちになっているほかはなかった。

その〝もの〟は、老人から五メートルばかりのところまでくると、立ち停って、老人を頭の天辺から足の爪先まで、しげしげと見ていたが、直径十五センチほどの黒い円盤状のものを取り出すと、それを顎の辺まで持ちあげたが、するとそれは目が眩むような強烈な閃光を放った。始めは殺人光線のようなものかと思った。しかし、彼の体には別に異状はない。

（あの怪物め、写真を撮ったのだな）

と思うと老人は廻われ右をしてその場から逃げ出した。しばらくのあいだは夢中になって走った。いい加減走ってから、そっと後を振り向いた。その〝もの〟は、円盤のところへ戻って丁度中へ入ろうとしているところだった。

どうやら円盤から危害を加えられるような様子のないことが判ると、リーヴス老人は、急に図

図しくなった。その場に立ち停って、改めて円盤の観察をはじめた。円盤の底からは四本の脚のようなものが出ていて、円盤はそれに支えられて着陸していた。その真ん中からは半円筒状の梯子のようなものが垂れていたが、その〝もの〟が、それを一段登る毎に、それは円盤の中へ吸いこまれるように突入して、最後にはすっかり中へおさまってしまった。とたんに物凄い轟音が起こった。ジェット機の排気ガスの爆発音に似ていた。が、それはすぐに止んで、こんどは笛のような音に変わった。すると円盤の縁が回転しだした。そして上昇をはじめた。同時に円盤を大地に支えていた四本の脚は円盤の体内にかくれた。十秒後には、円盤は視界から消えていた。

目撃談は真実である

リーヴスは宇宙人と思われるその〝もの〟を詳しく観察していた。形状は彼が宇宙人と直感したほどだから、いうまでもなく人間のような恰好をしていた。体は銀灰色の潜水服みたいな服ですっぽり包まれていた。それはカンヴァスのような荒い生地に見えた。手にはスキーのときはめる二又手袋をはめていたので、その下の手がどんなものであるかは判らなかった。しかし手袋は屈折自在だった。頭にはヘルメットをかぶっていた。これは宇宙飛行士がかぶるものにそっくりで、肩までずん胴になっており、前面は透明な物質でおおわれていた。リーヴスは、そのため宇宙人の顔を見ることができた。ただし見えたのは目の辺だけで、鼻、口、耳は判らなかった。つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.